

メール文に見られる条件表現「なら」の使用について
—メールの発信・返信別に注目して—

The Usage of the Conditional “*Nara*” in Email.
-Focusing on Outgoing and Reply Email-

国際戦略推進機構・金蘭美

立教大学・金庭久美子

キーワード：なら・発信メール・返信メール・選択肢から選ぶ用法・相手配慮

外国語キーワード：NARA, outgoing email, reply email, option choices, consideration for the other

要旨

本研究では 24 種類のメール文タスクを用い、日本語母語話者（NS）及び、日本語非母語話者（NNS）を対象にメール文を収集し、発信と返信別に注目して条件表現「なら」の使用頻度と用法を調べた。両者を比較した結果、NS の場合は「なら」の使用例の 7 割以上が返信であり、発信との差が顕著であった。しかし、NNS の場合は NS ほど返信、発信の顕著な差は見られなかった。また、タスク別に見たところ、特に日程調整のタスクで、NS と NNS における「なら」の用法に違いが見られた。NS は「相手から提供された選択肢から選ぶ用法」の使用が多く、NNS は「都合のいい用法」の使用が多いことがわかった。さらに、NS の「なら」の返信メールを分析した結果、「なら」を用いて、言い切りを避け表現を和らげ、自分の都合を前面に出さないことで相手配慮につながっていると考えられた。

英文要旨

In this study, 24 email tasks were used to collect compositions from Japanese native speakers (NS) and non-native speakers (NNS) to examine the frequency and usage of the conditional “*NARA*” in outgoing and reply email. A comparison of the two groups showed that NS significantly favored using “*NARA*” in replies rather than outgoing email, whereas there was not a significant disparity among NNS. In addition, there was a significant difference in the way NS and NNS use “*NARA*” when adjusting schedules. NS preferred using it when choosing from options provided by the other party, while NNS preferred using it to ask for convenience. Furthermore, analysis of NS reply emails showed that usage of “*NARA*” was considered to be a way to avoid stating the obvious, soften the expression, and show consideration for others by not putting one's own convenience at the forefront.

1. はじめに

本研究では、学習者と日本語母語話者の日本語のメール文のデータを収集しているが、日本語中上級レベルの学習者の中には、(1)のように「なら」を用いる例が見られた。下線部の「(ご都合が) いいなら」は誤用ではないが、適切だとは言えない。同じ場面での日本人の用例では、例(2)のように「なら」を用いず「ご都合がよろしければ」と述べている。

(1) 山田さんは最近忙ししですか。都合がいいですか？ いいなら、訪ねるつもりです。

(データI_task06_C005)

(2) もし、ご都合がよろしければお会いできないかと考えていますので、夏休みの予定をお伺いしてもよろしいでしょうか？ (データI_task06_J018)

条件表現「なら」は、初級の段階で導入される文法項目の一つであるが、学習者は「なら」をどのように用いているのだろうか。日本語母語話者の使用状況についてはコーパスを対象としている研究(中俣 2013、奈良 2021)が見られるが、学習者の「なら」の使用状況を調べている研究は管見の限り見当たらない。そこで、本研究ではメール文データを対象に、学習者と日本語母語話者の「なら」の使用状況を見ることにする。メール文を対象としているのは、日本語学習者が実際に「書く」活動を行う必要がある場面を想定しやすいこと、また、読み手が存在することから、読み手配慮など、さまざまな側面から考察できると考えたからである。また、本研究では発信か返信かにも注目する。というのは、メール文の教材では、「断り」を除けば「依頼」「お知らせ」「問い合わせ」等、書き手が発信する練習が主であり(築他 2005 等)、返信メールを扱っているものがあまり見られないためである。しかし、実際には、留学生は先生や事務局からのメールに返信しなければならないことが多々ある。そこで、本研究では、メール文に見られた条件表現「なら」の使用状況について、メール文の発信と返信というメール文の送信の仕方に注目し分析を行い、学習者の課題を明らかにしたい。

2. 先行研究

2-1. 「なら」の用法について

野田(2005)では、「なら」には、例(3)のような「仮定条件の機能」と例(4)のような、「相手の発言を受ける機能」があると述べられている。

(3) 暇なら、ちょっと手伝ってください。(p.6)

(4) 「海に行きたいなあ。」 「海なら、沖縄がいいですよ。」 (p.6)

野田 (2005) は、日本語教育文法が日本語学の体系主義や形式主義の悪影響を受けていることを指摘し、その例の一つとして「なら」を挙げている。「なら」には上記で述べたような二つの用法があるが、本当に必要かどうかを考えずにこれらの用法をまとめて同じ課で教えている教科書が多いことが指摘されている。しかし、どちらの用法をどの段階で教えるべきかについては示されていない。

中俣 (2013) は、「現代日本語書き言葉均衡コーパス」¹を用いて「なら」を対象に、用法と「なら」が共起する語について調べている。具体的には、野田 (2005) の「なら」の二つの機能を上位用法「A 相手の発言を受ける用法」、「B 仮定条件の用法」とし、表 1 に示すようにそれぞれ、(ア) ~ (エ) のような下位用法を設けている。

表 1 「なら」の下位用法と代表的な共起語 (中俣 2013 : 87)

上位用法	下位用法	代表的な共起語
A 相手の発言を受ける用法	(ア) アドバイス・勧めの前触れ用法	それなら、好きなら
B 仮定条件の用法	(イ) 特別なケースの前触れ用法	本来なら、本当なら
	(ウ) 代案提示の前触れの用法	無理なら、駄目なら
	(エ) 立場を表す用法	みなさんなら、私なら

また、中俣 (2013) の「なら」のコロケーション研究の結果をまとめると次のようなことが言える。²

- (I) 「なら」の半数以上が名詞、代名詞に接続して用いられる。
- (II) イ形容詞の出現頻度は低く、可否・好悪の判断に関わるナ形容詞の出現頻度が相対的に多い。
- (III) 代名詞では「それなら」の出現頻度が高く「(ア) アドバイス・勧めの前触れ用法」として使われる。

¹ 『現代日本語書き言葉均衡コーパス』(BCCWJ) は、「書籍全般、雑誌全般、新聞、白書、ブログ、ネット掲示板、教科書、法律などのジャンルにまたがって 1 億 430 万語のデータ」が格納されているコーパスである。(言語資源開発センター (<https://clrd.ninjal.ac.jp/bccwj/index.html> 2022 年 4 月 29 日閲覧))

² (I) ~ (VI) は、中俣 (2013 : 82) の (17) ~ (20) を引用しつつ、読みやすくするため、中俣の (18) と (20) の説明を 2 つに分け、さらに例を入れるなどして、補足する形でまとめたものである。また、これらの本文中にある下位用法「ア」~「エ」の記号は、中俣 (2013 : 82) にはないが、筆者らが表 1 をもとに追記したものである。

- (IV) 「本来なら」のような副詞的なものは、「(イ) 特別なケースの前触れ用法」として使われる。
- (V) 「好きなら」は「(ア) アドバイス・勧めの前触れ用法」で用いられるが、ネガティブな語の「駄目なら」「嫌なら」「無理なら」は「(ウ) 代案提示の前触れの用法」で使われている。
- (VI) 名詞では「皆さんなら」「私なら」のように人を表す名詞の出現頻度が高く、「(エ) 立場を表す用法」として使われる。

中俣 (2013) は、実際の言語資料を基に日本語母語話者の「なら」の使用状況を調べているが、このコーパスにはメール文は収録されておらず、また、読み手についてもメール文のように特定の読み手を想定して書かれたものではない。同じ書き言葉ではあるが、特定の読み手が存在するメール文データの場合は違う用法が見られる可能性がある。

2-2. 日本語指導書における「なら」の扱い

グループジャマシイ (1998) の『教師と学習者のための日本語文型辞典』では、「なら」について、「名詞を直接「なら」が受け、主題を表す。「ならば」の形で使われることもある。(例文は省略) 相手の言ったことやこれまでの話題にあがっていたこと、あるいはその場の状況から予測できることを話題として取り立てて、それに関して話を進める場合に用いる。相手から持ち出されたことがらを話題として取り上げる場合によく使われる。(グループジャマシイ 1998 : 396)」としており、これは野田 (2005) の「相手の発言を受ける機能」に該当する用法であると言える。また、同書では「なら」についてほかに、仮定条件の用法や反事実の用法などがあるとしている。

中西ほか (2021) の『場面とコミュニケーションでわかる日本語文法ハンドブック』では、「「なら」は「と」「ば」とは対照的に、名詞との接続が多いです。「Xはいいけど、それ以外はだめ」という対比に使われます。また、書き言葉では「できることなら」というコロケーションがよく使われます。(中西ほか 2021 : 392)」とあり、以下の例 (5) が挙げられている。(下線は筆者らによる)

- (5) ブタやギューはね、体によかないけどね、おばあちゃんは鶏肉ならかなり食べてもいって先生に言われるよ。(『名大会話コーパス』 data076 14650)

さらに、庵 (2017) の『一歩進んだ日本語文法の教え方1』では、「なら」の導入のポイントのひとつとして、「b. 「なら」は基本的に「相手の発話を受ける」主題表現である。次に、「なら」は「条件」ではなく、対話場面で使われる「主題」形式として「は」と関連付けて導入すべきだということになります。(庵 2017 : 24)」としており、基本的な用法は

「相手の発言を受ける」主題表現であると述べられている。

2-3. 日本語学習者の「なら」の使用について

山内(2005)では、日本語教育文法の観点から、今まで日本語教育では「どう教えるか」ということにのみ関心が向けられ、「何を教えるか」ということについてはあまり疑問がもたれてこなかった(山内 2005 : 148)」と指摘し、初級で教えた文法形式が、その後本当に学習者に使用されているかどうかについて検証を行っている。方法としては、「OPI」³の文字化データを用いて、日本語教科書『みんなの日本語』のシラバスで扱われている文法形式の出現有無を調べている。その結果、条件表現については「接続助詞」の項目で言及されており、中級で安定して使用しているのは「たら」のみであるとしている。

さらに、田中(2005)では、作文における条件表現の習得について調べ、結果として「と」「ば」「たら」「なら」は、教えられても、初級修了時にはほとんど使われていない。もっぱら「～たら」が使われ、かつ適切に使われている。「～たら」は初級の文法項目に適しており、初級の仮定条件の表現としては「～たら」1つで十分である。(田中 2005 : 80)」としている。

「なら」は話し言葉であれ、書き言葉であれ、中級でもあまり定着しない文法項目であるということから、初級で教える必要はないと言われているが、実際の日本語教育の現場では依然として初級で教えられている。「なら」自体はそれほど難しい文法項目ではないため、教え方次第では十分に使えるようになる可能性があると考えられる。では、実際に教科書の中では「なら」はどのように扱われているのだろうか。

以上を踏まえて、2-4 では日本語教科書における「なら」の扱いをみる。

2-4. 日本語教科書における「なら」の扱い

『初級日本語 げんきⅡ』では、第13課で「なら」を扱っており、主に、例(6)のような「contrast」、例(7)のような「limitation」を表すとしている。これらは、いずれも相手の発言を受けてはいるがアドバイスや助言をするわけではない。

(6) A: ブラジルに行ったことがありますか。B: チリなら行ったことがありますが、ブラジルは行ったことがありません。(『初級日本語 げんきⅡ』 p.31)

(7) A: 日本語が読めますか。B: ひらがななら読めます。(『初級日本語 げんきⅡ』 p.31)

『みんなの日本語初級Ⅱ』では、第35課で「なら」が取り上げられている。同書の教え

³ OPI (Oral Proficiency Interview) とは、テストと被験者が一対一で行う会話テストのことである。詳細については牧野他(2001)を参照されたい。なお、山内(2005)で用いられているデータは OPI の中級学習者 14 名分である。

方の手引きには「「Nなら」の形で、相手が持ち出した話題について主観的判断や主張（主に助言）を述べる（p.102）」とある。教科書には以下のような例が挙げられている。

(8) 練習 A：例) 土曜日ひま（いいてんき、やすみ）なら、海に行きませんか。
（『みんなの日本語初級Ⅱ』 p.78）

(9) 練習 B：例) パソコンを買いだいたいんですが。
→パソコンなら、パワー電気がいいですよ。（パソコン・パワー電気の）
（『みんなの日本語初級Ⅱ』 p.79）

また、『日本語初級 2 大地 メインテキスト』では、第 33 課で「なら」が扱われている。ほかの教科書と異なる点は、条件表現「ば」と一緒に導入されていることである。条件形の作り方がチャートで示されているが、いつどのように使うのかについては特に言及されておらず、『日本語初級 2 大地 文型説明と翻訳〈英語版〉』も活用の仕方以外の説明は見られない。以下の例 (10) (11) は『日本語初級 2 大地 メインテキスト』の「なら」の導入で挙げられている例文である。

(10) 成績がゆうしゅうなら、この奨学金がもらえます。（『日本語初級 2 大地』 p.66）

(11) 留学生なら、この奨学金がもらえます。（『日本語初級 2 大地』 p.66）

2-2 で示したように、日本語指導書における「なら」は、相手の発言を受けて助言をする用法が主であるとされているが、教科書のうち、『みんなの日本語初級Ⅱ』ではそれが反映されているのに対し、『初級日本語 げんきⅡ』や『日本語初級 2 大地』では取り上げられていない。では、実際に日本語学習者はどのように「なら」を使っているのだろうか。また、「なら」は、初級で教えてあまり定着しない文法項目であることも指摘されているが、前述の通り依然として初級の文法形式として取り上げられているのが現状である。そこで、本研究ではメール文における「なら」の使用状況を調べ、日本語学習者の課題を明らかにし、その結果から特定の読み手が存在するというメール文の特徴を生かした指導について考えたい。

3. 調査と結果

3-1. 調査の概要

本研究では、筆者らが収集した 24 種類のメール文データを対象に、発信メールと返信メールにおける条件表現「なら」の使用状況を比較した⁴。24 種類のメール文のタスク内容を

⁴ 本研究で用いている 24 種類のメール文データは、メール文作成支援システムの開発の

表 2 に示す。

表 2 24 種類のメール文タスクの内容

データI	データII
task01 知り合いに花見パーティーの持ち寄りの品について返信する	task09 先生に病気で欠席することを連絡する
task02 先生に留学の報告をする	task10 先生のメールに返信し、体調について伝える
task03 大学職員に来日時期について問い合わせをする	task11 先生に発表日の変更について聞く
task04 ホストファミリーのお母さんに誕生日プレゼントのお礼を言う	task12 先生に期末試験について相談する
task05 知り合いの翻訳の依頼を断わる	task13 先生に欠席した日の資料について聞く
task06 訪問のためにホストファミリーのお母さんに予定を聞く	task14 先生に欠席した日の資料と課題について聞く
task07 寮の管理人さんに荷物の預かりを依頼する	task15 先生に相談するために予定を聞く
task08 寮の管理人さんに備品の持ち出しについてお詫びを言う	task16 先生に奨学金の推薦状を依頼する
	task17 大学のイベントを申し込む
	task18 大学のイベントの申し込みをキャンセルする
	task19 チューターと一緒に勉強したいことを伝える
	task20 チューターの提案を断り自分の勉強したいことを伝える
	task21 チューターとの約束を変更する
	task22 チューターに買い物の付き添いをお願いする
	task23 チューターの誘いに行ける日を答える
	task24 チューターの誘いに返信し、詳しい情報を聞く

※網掛けのタスクは返信タスクである

また、データの対象者、人数等については表 3 に示す。メール文タスクは留学生が遭遇する状況を想定したもので、例えば指導教員への推薦状の依頼や欠席の連絡などである。

データI、IIは、データを収集した時期やタスクの種類、調査協力者などが異なっているため、便宜的にIとIIに分けている。全体の 24 種類のタスクのうち、発信が 17 タスク、返信が 7 タスク（表 2 の網掛けとなっているタスク）となっている。調査の際、タスクの指示文はデータIの場合、調査協力者の母語で提示し、データIIは、簡単な日本語と英語で提示した。調査協力者は、日本人大学生（以下、NS）と日本語非母語話者（以下、NNS）で、NNS は国内外で日本語を学んでいる日本語学習者である。なお、調査協力者には、データ 1 の場合は 8 タスクすべてについて、データ II の場合は 16 タスクすべてについてメール文を書いてもらった。

ためにその基礎データとして収集したものである。「なら」の用例収集を目的としたものではない。

データIとIIを合わせた 1648 件のメール文データを対象に、文字列検索ツール「Devas (Ver.3.5 beta)」を用いて、検索語に「なら」を入力し、使用例を抽出した。その後、メールの発信と返信別に使用数を確認し使用されている「なら」の用法の比較を行った。

表 3 調査に用いたデータの詳細

データ別 (数)	タスクの数 及び指示文の言語	調査協力者 ⁵
データI (720)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 8 タスク (発信 6 : 返信 2) ・ 日本語、中国語、韓国語 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人大学生 (NS) : 30 名 ・ 日本語非母語話者 (NNS) : 60 名 (韓国 30・中国 30)
データII (928)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 16 タスク (発信 11 : 返信 5) ・ 日本語+英語 	<ul style="list-style-type: none"> ・ 日本人大学生等 (NS) : 30 名 (うち大学院生 1 名) ・ 日本語非母語話者 (NNS) : 28 名 (韓国 7・中国 6・ドイツ 11・その他 4)

3-2. 結果

「なら」の使用数の比較の結果を示したのが次の表 4 である。発信メールの 17 タスクに見られた「なら」の使用数は、NS と NNS 合わせて 24 件、返信メール 7 タスクに見られた「なら」の使用数は 40 件で、返信メールの方が多く見られた。また、NNS の場合、42 例のうち韓国語母語話者に 20 例、中国語母語話者に 19 例、その他 3 例 (ドイツ語母語話者 2 例、テルグ語母語話者 1 例) と特定の母語話者や特定の調査協力者が多用している様子は見られなかった。

表 4 発信メール・返信メール別「なら」の使用数の比較

発信／返信	使用数	NS	NNS
発信 (17 タスク・1178 件)	24 (37.5%)	6 (27.3%)	18 (42.9%)
返信 (7 タスク・470 件)	40 (62.5%)	16 (72.7%)	24 (57.1%)
計	64 (100%)	22 (100%)	42 (100%)

特に、NS の場合は「なら」の使用例の 7 割以上が返信メール (16 例 72.7%) であり、発信メール (6 例 27.3%) との差が顕著であった。それに対し、NNS の場合は NS ほど発信

⁵ NNS 全員に対し日本語運用能力を測定するテストである SPOT(Simple Performance-Oriented Test)を実施した結果、88 名中 84 名が中上級、4 名が初級レベルであった。

(18例 42.9%) と返信 (24例 57.1%) の差はそれほど見られなかった。

次に上記の使用例を用法別に分けて比較してみた。結果は表5の通りである。

表5 「なら」の用法分類基準と使用状況

上位用法	下位用法：「なら」の共起語の例 ⁶	使用数の比較			
		NS		NNS	
		発信	返信	発信	返信
A	①アドバイス・勧めの前触れ用法：それなら、好きなら	0	0	0	0
	②代案提示の前触れ用法：テスト明けなら	0	4	0	7
	③相手から提供された選択肢から選ぶ用法：日曜日なら	0	12	0	6
	④意思表示の用法：お手伝いなら	0	0	0	3
誤用		0	0	0	5
A計		16 (72.7%)		21 (50.0%)	
B	①アドバイス・勧めの前触れ用法：行くなら ⁷	0	0	1	0
	②特別なケースの前触れ用法：本来なら	2	0	0	0
	③代案提示を伴う都合伺いの用法：都合が悪いなら	0	0	2	0
	④代案提示を伴わない都合伺いの用法：都合がいいなら、可能なら	3	0	9	0
	⑤立場を表す用法：鈴木さんなら	0	0	0	0
	⑥その他：もしそうなら ⁸	1	0	1	2
誤用		0	0	5	1
B計		6 (27.3%)		21 (50.0%)	

⁶ 表5に挙げている下位用法における共起語の例は、本調査で用いたデータの用例が0であったA-①「それなら、好きなら」、B-⑤「鈴木さんなら」のみ中俣(2013)のものを引用している。

⁷ Bの①「行くなら」の例を(b)に示す。

(a)「(前略)この漫画は以前からずっと買いたいです。届くときに本当に感動しました。

将来は上海へ行く(→来る)なら、ぜひ私に連絡してください。(データ I_task04_C014)」

⁸ Bの⑥その他に分類した例の一つを以下に示す。task14のタスクの内容は、前回の授業に欠席したため、授業の資料がほしいということと、次回の課題について先生に尋ねる、というものである。

(b)「また、次回までの課題がありますか。もしそうなら、それは何ですか。(データ II_task14_G11)」

AB 計		22	42
------	--	----	----

用法の分類については前述の表 1 に示した中俣（2013）の用法の分類を参考にしつつ、それに当てはまらない用法については新しく分類項目を立てて分類を行った。中俣の分類を参考にしたのは、現代日本語書き言葉均衡コーパスを対象としているため、対象となる文章のジャンルや用例数が多く「なら」の用法についてもある程度網羅している可能性があるためと判断したからである。本研究で立てた新しい分類項目は、A「相手の発言を受ける用法」に下位用法を設け、「②代案提示の前触れ用法」「③相手から提供された選択肢から選ぶ用法」「④意思表示の用法」とした。また、Bの用法に「①アドバイス・勧めの前触れ用法」を加え、中俣（2013）の「(ウ) 代案提示の前触れ用法」を「③代案提示を伴う都合伺いの用法」「④代案提示を伴わない都合伺いの用法」とした。Bのいずれの分類にも当てはまらないものを「⑥その他」に分類した。

表 5 を見ると、NS の A の用法は 16 件すべて返信メールでみられ、B の用法は 6 件とも発信メールでみられた。また、NNS の場合も、B の 2 例をのぞき、A は返信メールで、B は発信メールでみられた。用法別に注目してみると、NS の場合は「A-③：相手から提供された選択肢から選ぶ用法」が最も多く 12 件で、NNS の場合は「B-④：代案提示を伴わない都合伺いの用法」が多く 9 件であった（表の網掛けの箇所）。

調査の結果をまとめると、次の 1) と 2) の通りである。

- 1) 「なら」の使用数について見ると、「発信メール」より「返信メール」の方が「なら」を多く使用している。特に、NS の場合は NNS に比べ、「発信メール」と「返信メール」の差が顕著である。
- 2) 「なら」の「用法」について見ると、NS は「返信メール」の「③相手から提供された選択肢から選ぶ用法」が多いが、NNS は「発信メール」の「④代案提示を伴わない都合伺いの用法」が多い。

4. 考察

4-1. 発信メールにおける「なら」

3 節の調査結果から、NS は、発信メールの場合、返信メールと比較して「なら」をあまり使用しないことがわかった。一方、NNS は、返信メールでも「なら」を用いていたが、発信メールでも同程度「なら」を用いていた。NNS はどのような場合に「なら」を用いたのだろうか。

NNS は、B の「④代案提示を伴わない都合伺いの用法」の使用例が多く見られ、例えば何かを依頼する際に相手の物理的・時間的都合を尋ねるときに用いている。また、2 件ではあるが「③代案提示を伴う都合伺いの用法」でも「都合が悪いなら」のように「なら」

を使っており、これらを合わせると、NNS は発信メールで相手の都合を聞きたい際に「なら」を選ぶ傾向があるように思われる。

次の例 (12) と例 (13) は、発信メールにおける NNS の「④代案提示を伴わない都合伺いの用法」と「③代案提示を伴う都合伺いの用法」の例である。例 (12) のタスクの内容は、ホームステイの際にお世話になった北海道に住んでいる日本人家族（ホームステイのお母さん）に、今度北海道に旅行に行くので、訪問してもよいかを尋ねるというものである。また、例 (13) は、日本語の先生にわからなかったことを質問したいので、明日の午後伺ってもよいかを先生に相談するものである。例 (12) は、都合を伺うところで、例 (13) は、代案を提示するために使用されているが、どちらも相手の都合を尋ねるものであると言える。

(12) この夏休みに北海道へ旅行に行くつもりです。おぼさんのところへ尋ねたいですが、いかがでしょうか。もしご都合がいいなら、教えてくださいね。(データ I_task06_C010)

(13) そして、明日の午後先生に会いたいです。この時間はよろしいでしょうか。
都合が悪いなら、他の時間もいつでもいいですよ。(データ II_task15_C004)

これらのメール文は、文意は十分に通じるが、例 (12) でも例 (13) でも、日本語母語話者であれば相手が目上であることを考え、「なら」を用いずに「ご都合いかがでしょうか」などを用いる。日本語母語話者の例を以下に示す。

(14) 山田さんのご都合を教えてもらえないでしょうか。(データ I_task06_J011)

(15) 明日の午後にお伺いしたいのですが、ご都合はいかがでしょうか。(データ II_task15_J005)

学習者がこのように「なら」を使うのは、「都合がいい」「都合が悪い」をひとまとまりの連語表現としてとらえており、その表現に「なら」を加えて使用しているからではないかと考えられる。

4-2. 返信メールにおける「なら」

NS は「発信メール」より「返信メール」で「なら」を多く用いていた。NS が「返信メール」で「なら」を多く用いたのは、野田 (2005) や庵 (2017) でも言われている通り、「なら」は相手の発言を受け、助言やアドバイスをする際に使われることが多く、「返信」の際に用いるのは、こういった「なら」の基本用法と関係があると思われる。では、NS は「なら」のどのような用法を用いたのだろうか。

NS が用いた用法は、「A-③相手から提供された選択肢から選ぶ用法」で 12 例と最も多かったが、NNS はその半分の 6 例にとどまっていた。

「A-③相手から提供された選択肢から選ぶ用法」は、2 種類のタスクにみられた。一つは、花見パーティーの持ち寄り品のリストから持っていけそうなものを返信するタスク（データIの task01）である。もう一つは、チューターから今週の土日の都合を聞かれ返信するタスク（データIIの task23）である。

資料 1 にこれらのタスクの受信メールの内容を示し、本文中に相手から提供された選択肢と思われる箇所を網掛けで示しておく。これらのタスクでは「持ち寄り品のリスト」や「今週の土曜日から日曜日」という選択肢が与えられることで、「なら」が使用されやすくなっていると考えられる。

資料 1 データ I_task01 とデータII_task23 のタスク

データ I_task01 の受信メール
〇〇さん こんにちは。留学生交流サークルの橋本です。 先日、メールで連絡をしたお花見の件ですが、日程が決まりましたのでお知らせします。 ----- 日時：4月10日（金）夕方5時から 場所：大学 中央広場 ----- 持ち寄りパーティーです。〇〇さんも何かお願いできますか？ 以下の中から、何が持ってこられそうですか？ 1. ジュース2本 2. バナナ5本 3. いちご1パック 4. サラダ2人分 それから、準備を手伝ってくれる人を募集しています。 〇〇さんは、どうですか？ お返事お待ちしております。 橋本
データII_task23 の受信メール
〇〇さん 元気ですか。夏休みに北海道に行ってきました。お土産を渡したいので、いつ会えるか教えてください。私は今週なら土曜日と日曜日が空いています。 渡辺

これらのタスクでは、「なら」を使用せず、「ジュースを持っていきます」や「日曜日がいいです」のように述べても特に問題はない。その場合は一方的に自分の都合について発言することになる。しかし、NS は例 (16) (17) のように「なら」を用いて、選択したもの

や時間などを相手に伝えていた。例(16)は、「行けそうです」も言い切りを避ける形で相手配慮を示してはいるが、相手から提示された「ジュース、バナナ、いちご、サラダ」(資料1 データI_task01)の選択肢から選ぶ場合、「なら」がない「バナナを持って行けそうです」は、「バナナ」のみ選択したという意味になる。一方、「バナナなら持って行けそうです」のように「なら」を用いると、バナナを選択したいことを控えめに表すことになりより配慮した印象を与えるのではないかと思われる。また、例(17)の場合も、相手から土曜か日曜か(資料1 データII_task23)の選択肢が提示されており、「日曜日はいつでも」より「日曜日からいつでも」のように「なら」を用いて述べることで、選択肢から選んではいるが自分の都合を前面に出さない形で示しており、「いつでも」だけの場合よりも配慮した印象を与えていると考えられる。中西ほか(2021)では、「なら」は、「Xはいいけど、それ以外はだめ」という対比を表すとしているが、上記の例のように「相手から与えられた選択肢から選ぶ」という文脈で使用される場合は、「それ以外はだめ」であることを強調して相手に伝える必要はなく、むしろ「Xはいいけど」のほうを控えめに伝えていられると思われる。

このような選択肢から選ぶ際に「を」「は」「が」ではなく「なら」を用いることで「自分の都合を前面に出さない形で配慮する」ということは従来指摘されていないことである。このことが明らかになったのは、今回調査対象としているデータがメール文であり、さらに返信メールであることからだと言える。

(16) お花見の日程確認いたしました。バナナなら持って行けそうです。(データI_task01_J012)

(17) お土産を買ってくれてありがとうございます。私は日曜日からいつでも空いています。(データII_task23_J001)

(16) や (17) の例のように「なら」が用いられるのは、言い切りを避け表現を和らげたり、また、相手に対しさらに選択をゆだねたりすることが相手配慮につながるためではないかと思われる。メール文の場合は、特定の読み手が存在することで、伝える内容だけではなく、どのように伝えるのかについても意識を働かせる必要があるが、NSはこうした読み手にも配慮した形で述べることを意図しているのかもしれない。

5. まとめと日本語教育への応用

本研究ではメール文タスクを用い、日本語母語話者(NS)及び、日本語非母語話者(NNS)を対象にメール文を収集し、発信と返信別に注目して、条件表現「なら」の使用頻度、用法を調べた。その結果、NSの場合は発信メールではなく、返信メールで「なら」を使用す

ることが多かった。しかし、NNS の場合は NS ほど返信、発信の顕著な差は見られなかった。また、タスク別に見たところ、NS は、特に日程調整のタスクで「なら」を用いており、「相手から提供された選択肢から選ぶ用法」の際に使用していた。一方、NNS は「都合伺いの用法」の際、「なら」の使用が多いことがわかった。さらに、NS の「なら」の返信メールを分析した結果、「なら」を用いて、言い切りを避け表現を和らげ、自分の都合を前面に出さないことで相手配慮につながっていると考えられた。

「なら」の基本的な用法が相手の発言を受けて何か助言したり、お勧めを言ったりするものであるとされていることを踏まえると、返信メールで使用されるというのは当然のこととも言えるかもしれない。特定の読み手が存在し、さらに、相手からのメールの内容を踏まえて返信する、ということで、返信メールの場合、相手の発言を受ける用法の練習に適しているのではないかと考える。日本語教科書の中では、会話の文脈ではあるが、対比させる練習が主であったり、アドバイスをする場面を設定したりしているが、単文レベルの練習であるため、メール文のような文脈単位での練習は場面を想像しやすく学習の理解を助けられると思われる。

ここで、学習者へのメールタスクを考えてみたい。本研究では、NS は「A-③相手から提供された選択肢から選ぶ用法」で「なら」を多く使用しており、そのタスクは、持ち寄り品のリストから持っていけそうなものを返信するタスク（データIの task01）と、チューターから今週の土日の都合を聞かれ返信するタスク（データIIの task23）であった。したがって、同様のタスクを与えれば、「なら」を無理なく使うことができるはずである。

そこで、次のようなメールタスクでの練習を提案する。

資料2 「なら」の練習のためのメールタスク

タスク 1	友だちから次のパーティーについてメールで相談を持ちかけられた。パーティーの最後にみんなでやるものとして、カラオケ、ダンス、ゲームの中でどれができそうか聞かれた。返信してください。
タスク 2	友だちはあなたに漫画を返したいのであなたの部屋に持っていきたいそうだ。あなたはいつ部屋にいるか、土曜日の夕方と日曜日の朝とどちらがいいかメールで聞かれた。返信してください。

タスク 1 の場合は、「ゲームがいいです」と積極的に返事をすることも可能であろうが、やわらげた言い方をすれば、「ゲームなら私もできそうです」のように返事するといえると思われる。

タスク 2 の場合、「土曜日の夕方がいいです」や「土曜日の夕方、家にいます」という答えも可能であろうが、自分の都合を前面に出さないように「なら」を用いて「土曜日の夕方なら家にいます」という言い方が望ましいと思われる。

タスク作成のポイントは、「何か助言したり、お勧めを言ったりする」状況であること、

また、「相手から提供された選択肢から選ぶ」状況であることである。このような状況を作り出すことができれば、返信メールでの「なら」の練習が可能になると思われる。

発信か返信かによって出現する文法があるのか、さらに多くの例を見ていく必要あると思われるが、今回「なら」を例にして比較した結果、表れ方に差があることが明らかになった。メール文の指導の際には、発信メールだけでなく返信メールも取り上げ、様々な状況に対応できるように指導していきたい。

付記

本稿は 2021 年 9 月 20 日に開催された第 57 回日本語教育方法研究会におけるポスター発表の内容を修正加筆し、論文形式に書き改めたものである。

謝辞

本研究は科学研究費基盤研究（C）19K00734 の助成を受けた。

また、データ I の韓国人日本語学習者のデータ収集にあたり、韓国国立 HANBAT 大学の金玄珠副教授にご協力いただいた。ここに感謝の意を表する。

参考文献

庵功雄（2017）『一歩進んだ日本語文法の教え方 1』くろしお出版

グループジャマシイ（1998）『教師と学習者のための日本語文型辞典』くろしお出版

スリーエーネットワーク（2001）『みんなの日本語初級II教え方の手引き』スリーエーネットワーク

田中真理（2005）「学習者の習得を考慮した日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版、pp.63-82

中西久美子・坂口昌子・中俣尚己・大谷つかさ・寺田友子（2021）『場面とコミュニケーションでわかる日本語文法ハンドブック』ひつじ書房

中俣尚己（2013）「日本語教育における例文づくりのためのコーパス研究—条件の「なら」を例として—」京都教育大学国文学会誌（40）、pp.80-90

奈良夕里枝（2021）「日本語教育の現場における条件表現ナラの効果的な提示のしかた—話し言葉と書き言葉におけるナラの用法分類から—」『人文』（19）、pp.39-52

野田尚史（2005）「コミュニケーションのための日本語教育文法的设计図」野田尚史（編）『コミュニケーションのための日本語教育文法』くろしお出版

牧野成一・鎌田修・山内博之・齋藤眞理子・萩原稚佳子・伊藤とく美・池崎美代子・中島和子（2001）『ACTFL-OPI 入門—日本語学習者の「話す力」を客観的に測る—』アルク

築晶子・大木理恵・小松由佳（2005）『日本語 E メール の書き方』 The Japan Times
山内博之（2005）「話すための日本語教育文法」野田尚史（編）『コミュニケーションのた
めの日本語教育文法』くろしお出版、pp.147-165

参考教科書一覧

スリーエーネットワーク（1998）『みんなの日本語初級II本冊』スリーエーネットワーク
坂野永理・池田庸子・大野裕・品川恭子・渡嘉敷恭子（1999）『初級日本語げんきII第3版』

The Japan Times

山崎桂子・石井玲子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子（2009）『日本語初級2 大地』スリ
ーエーネットワーク

山崎桂子・石井玲子・佐々木薫・高橋美和子・町田恵子（2010）『日本語初級2 大地 文型
説明と翻訳（英語版）』スリーエーネットワーク